

ぼくのハムスター

昭和五十四年度 六年 男児

「ただいま。」と言うと、ドタバタと急いで二階にかけ上がった。

カバンをおろして、ハムスターを見た。ちょっと息を吹き付けた。いつもなら飛び上がって目を覚ますのだが、今日ばかりは、目も覚まさないし、起き上がろうともしない。ぼくはあわてた。かごをゆさぶってみても動かない。今度は落ち着いてかごをはずしてよく見た。死んでいた。ぼくはびっくりした。体を丸くして死んでいた。

原因はよく分からなかったが、エサ箱を見るとからっぽだった。口の中のほお袋にも、詰め込んでいなかった。そこで空腹が原因かと考えた。とてもすまない気持ちになった。

買った当時は、エサを食べているところがとてもかわいかった。夜ねていると、かごをかじってうるさくて、よくねられない事もあった。指をかじって困らせられた時もあったが、五か月もたつと、よく慣れてとてもおとなしくなった。そんな事が次々に浮かんできた。

しかし今さら死んでしまったのでは、腹いっぱい食べ

させることもできない。仕方なく土に埋めようと思ったが、そのしゅん間、

「あっ。」と、心の中でさげんだ。かすかにほんのわずか息を吸っていることが分かった。それを見てぼくは、ふと思いだした。それは去年の事だったが、その頃飼育していたハムスターが息も絶え絶えに呼吸しながら半分死にかけていた時である。父が、心臓のマッサージをしながら、少しずつ水を口に入れて苦労しながら、やっと生き返らせた事を思いだしたのだ。

ぼくは、早速試してみようと考えた。冷たくなっていくハムスターをさわるのは、とても気持ち悪かったが、そんな事を言っていられない。ぐっどがまんして、親指でハムスターの腹を押しながら、体全体をもおようにして心臓マッサージをし、父のやったように、だっし綿に水をしみ込ませて、口を開けて入れてやった。

こうしているうちに、ひげが動きだしたようだ。それから更に十五分程続けていると、手がびくっと動き始めた。一しゅんびくくりして安心もした。少しずつ不安が消えていった。だが目はまだ一向に開かない。

きっと生き返らせると言う期待をかけて、根気よくやった。暖ぼうのない二階なのに寒さが少しも感じられな

かった。その時目が開いてきた。左目の方だけがはっきりと開いて、息も大きく吸い込んできたのだ。部屋の中にもさっと明るさが差し込んでくるようだった。そっとたたみの上に置いてみると、ふらつきながら歩いて、またじつと止まって呼吸を安定させたりしている。

だんだん調子を取りもどしているようだ。そこで暖かい所へ連れて行った。少しずつ元気がでてきたようだ。

よろけながら走ったぼくは、もうこれなら安心と改めて、そっとかごの中へ入れてやった。

「ぼくが助けてやったんだぞ。」と、心の中で言ってやった。

それから今ではもう活発に動き回っている。ぼくにもとても信じられないような気がするけれど、自分の力でこのハムスターを生かしたのだと思うと、とてもうれしい。これからはきちんときさをやって、この冬を越させてやりたいなあと思っている。